徒然草　第十一段　兼好法師

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたるいほりあり。木の葉にうづもるるかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

かくてもあられけるよ、とあはれに見るほどに、かなた

の庭(にわ)に、大きなる柑子(こうじ)の木の、枝もたわわになりたるがまはりをきびしく囲(かこい)ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかば、と覚(おぼ)えしか。